

◆登場人物
男 |
女 |

受付

別役実

事務机がひとつ。椅子がふたつ。ひとつは事務員用、ひとつは来客用である。

女―が現れ、事務机の上に《受付》の札を出し、机の上の事務用品の整理をはじめ。

男―が、やや迷いながら現れる。

男― えーと、ここですか、受付は……？

女― (やや怪しみつつ) そうですよ……。

男― 実は今、そこだろうか来て来たのですが……。

女― 待って下さい(仕事を始める)。

男― 何ですか……？

女― 待って下さいって言うてるじゃありませんか、まだこの整理がついていないんですから。

男― わかりました。それでは、と……、ここで待たせてもらっていいのかな……。

女― 何です……？

男― いえ、ここで待たせてもらっていいのかどうかと思ひまして……。

女― それは質問ですか？

男― 質問……？ いや、そういうあれじゃないんですけどね、私はただ……。

女― 私に話しかけないで下さい。そう言っているはずですよ。

男― ええ、わかってますけど……。

女― あなたが何か言う度に、私、間違えるんですから。そうでしょ。私、今、この筆立てをどこに置けばいいかについて、もの凄いアイデアを思いついたんです。そのとたんにあなたが声を掛けてきたんで、忘れちゃったじゃありませんか。

男― 失礼しました……。

女― もの凄いアイデアだったんですよ、それは。私、ここにこの事務所が出来て以来、ずっとそのことばかり考えてきたんですからね。ここだっていうのを、さっき思いついたんです。あなた、独身ですか……？

男― え？ いや……そうじゃありません。家内と子供が四人おります。その……筆立てを置くんですか……？

女― そうですよ。

男― この……机の上です……？

女― 決まってるじゃありませんか。でも、ここじゃありませんよ。ここだと、書きものをしながら手を伸ばすにはよくても、電話が鳴って受話器をとる時に邪魔になりますからね。そうでしょ。あなた、ここに置けばいいって考えたんじゃないやありません？

男― いえ、そうじゃありませんけどね……。

女― それじゃ、ここですか？ 冗談じゃありませんよ。こんな所に置いたら、手を伸ばす度にこうですか。そんなことするくらいなら、私その度に拷問にかけられた方がよっぽどましだわ。私、右ききですよ。あなた、左ききですか？

男― いえ、右ききですが……。

女― それなら、それくらいのことわかりそうなもんじゃありませんか。それに、こんなところに置いたら、ここんところ人が通るんですからね、突っかけて床に払い落されたりしたらどうするんです。そういうことを、ちゃんと考えてから言ってお下ささなくちゃ困るじゃありませんか。

男― だって、私は別に、そんなこと言ってやしないじゃないですか、そこに置いた方がいいなんて……。
女― 言いやしませんでしたけども、考えたでしょう。私がここは駄目ですよって言った時、それじゃあこっちならって、あなたは考えたはずなんです。そうですね。よして下さいよ。あっちだ、こっちならって、言うだけなら誰にでも出来るんですから……。 本当に……。子供を四人も生んだりして……。

男― 何ですか……？

女― だって、四人でしょ。あなた、子供を四人生んだって、さっき自分でそう言ったんですよ。

男― 言いましたけど……。

女― 少しは反省したらどうなんです……。

男― 反省って何です……？

女― 生みすぎですよ、四人なんて。世界の食糧事情がどうなっているか、考えてみたことがあるんです

か？

男― そりゃそうですけど……私共の方にだって事情があったんですから……。

女― どんな事情です？

男― まあ、いいじゃありませんか、そんなことは……。ともかく、その筆立てを置く場所を決めましよう。

女― いいえ、言ってみて下さい。どんな事情なんです？

男― いえ、たいしたことじゃありませんよ、ただ、最初生れた子が女の子だったんです。それで……。

女― わかりました。あなたは男の子が欲しかったんです。ところが、二番目の子も女の子だった。そうですね？

男― ええ、まあ……。

女― 三番目の子も女だった。

男― そうですよ……。

女― 四番目の子はもうどうでした？

男― 女の子でした……。

女― 何やってるんです。

男― しかしねえ、あなた……。

女― いいですか、私、あなたが五番目を生んだら、訴えますよ。

男― 何を言ってるんです。関係ないじゃないですか、そんなこと……。

女― 関係ない？それじゃあなたは、あなたの下らないプチブル的な欲求のために、全世界の食糧事情が危機に瀕しているのを、私に腕をこまねいて見ていろって言うんですか？

男― そんなに大げさなことじゃないでしょう……。

女― いいえ、大切なことですよ、これは。あなたは今、どれほどのカンボジアの子供たちが、飢えて餓死寸前になっているか、知っているんですか……？

男― まあ、知ってますけどね……。

女― 何人です？

男― 何ですか……？

女― 何人ですって聞いていますよ。何人のカンボジアの子供たちが飢えて死にかけているか、あなた今、知ってるって言ったじゃありませんか。

男― ええ、でも、数までは……。

女― 二十九万三千六百九十二名です。

男― はあ……。

女― 言ってみてください。

男― 何ですか……？

女― 今、私の言った数です。カンボジアの飢えた子供たちの数ですよ。言えないんですか？

男― ええ、だって、今聞いたばかりですし……。

女― 二十九万三千六百九十二名。あなた本当に、この子供たちのことを可哀そうだと思っているんですか？

男― そりゃあ、思ってますけどね……。

女― 覚えておいて下さい。二十九万三千六百九十二名なんですから。

男― 二十九万三千六百九十二名ね……。

女― あなたが、二番目の子が生れた時にあきらめていれば、このうちの二人は飢えなくてすんだんです。

男― しかし、それとこれとは話が違うじゃありませんか。

女― どう違うんです？

男― まあ、いいですよ。ともかく早いとこ受付をすましていただけませんか、私もそんなにゆっくりはしてられないんですから……。

女― この子供たちだってそうですよ。

男― 何ですか……？

女― この子供たちだってゆっくりはしてられないんです。明日にも餓死しようとしているんですからね。

男― いやいや、それはわかりますよ。わかりますけど……。

女― いいえ、あなたたちともわかってやしないんですよ。今現在、二十九万三千六百九十二名の飢えた子供たちがいて、その子供たちの食べる分をあなたの子供たちが食べているんだということについてね……

(机の抽出しから何かを探し出そうとしている)。

男― あなた、そういう言い方はよして下さいよ。うちの子供たちにはちゃんと、私の働いた分で食べさせているんですから。

女― そういうことじゃありません。いいですよ、今ここに写真がありますから（出して）これです。見て下さい。

男― （顔をそむけて）やめましょう。わかってるんですから……。

女― 何故 見ないんです？

男― いや、見ますよ（やむなく、やや離れて見る）。

女― 手足がこんなに細くなって……。お腹がふくれて……。そうなんですよ、飢えるとみんなお腹がふくれるんです。見えますか、これ……。この口のところに……。ハエですよ。ハエがたかっているんです。この子たちには、もうこれを追っばらう力もないんですよ……。

男― ええ……。 （ふと何気なく）しかしこれ、カンボジアでなく、コンゴの子供たちじゃありませんか……？

女― ええ、そうですね。これはコンゴです。でも、カンボジアだって同じことですよ。飢えた子供たちというのは、みんな同じなんです。それともあなた、コンゴの子供たちなら可哀そうじゃないって言うんですか？

男― いえ、そんなこと言ってやしないじゃないですか。私はただ、コンゴかなって思っただけなんですから……。

女― ひどいと思いませんか……？

男― まあ、思いますけどね……。

女― 何とかしてやりたいとは思わないんですか？

男― そりゃあ思いますけど、しようがないでしょう、思ったって……。

女― あなたは、この子供たちにカンパをしましうって呼びかけても、素通りしてしまうんですか？

男― いや、そういうことがあれば、それは何がしかのものは出しますよ。出来る範囲内のはね。しかし、たとえそのくらいのことをしたところで……。

女― じゃあ、カンパして下さいませんか？

男― 何ですか……？

女― だって、あなた今、カンパして下さいって言ったじゃありませんか、飢えた子供たちのために……。

男― そりゃあ、まあ、言いましたけど……。ここでは、そういうこともやっているんですか……？

女― え、ここではありません。(電話器をとって番号をまわしはじめる) この三階に、そういうものを受け付ける事務所があるんですよ。

男― でも、ちよっと待って下さいよ。

女― カンパ、なさらないんですか？

男― いや、しますけども、私はとにかく……。(やや不安になってあたりを見まわし) ここは、ヨシダ博士の神経科の相談室じゃないんですか……。

女― 大丈夫です。電話しとくだけですから……。 (電話に) パレスチナ難民援助協会……。 ええ、そう

よ。三階の方の……。

男― パレスチナ難民援助協会……？

女― ……。

男― あなた、今、パレスチナ難民援助協会って言いませんでしたか……？

女― ええ、そうですよ……。

男― だって、カンボジアじゃないんですか。あなたさっきは、カンボジアって言いましたよ、確か……。

女― (電話に) あ、タカコさん、私。ええ、そう。ちょっと待ってね……。 いえ、すぐなんですから……。

…。(男―に) パレスチナじゃないやんですか？

男― いえ、そうじゃありませんけども、あなたさっき確かカンボジアと言ったような気がしたもんですから……。

女― さっきはカンボジアって言いましたよ。でも、これはパレスチナなんです。だって、パレスチナの子供たちも飢えているんですからね。

男― だから、わかりましたよ、いいですけどもね、パレスチナでも……。

女― でも、もしあなたが、どうしてもカンボジアにこだわるようでしたら、私、そっちの方の事務所にこれまわしてもいいんですよ。

男― いや、いいですよ。パレスチナでいいです。

女― (電話に) ごめんなさい……。いえ、そうじゃないのよ……。え？ いいえ、知らないわ……。まあ

……。そう……？へえ……。え？いえいえ、そうじゃなくてね、今ここに見えたお客様に私、パレスチナの可哀そうな子供たちのお話しをしたの。そうしたらその方がひどく感動なさってね……。いえいえ、どういたしまして……。それでね、その方が是非その子供たちにカンパを……。え？カンパ……。ええ、そうなの……。

男― あの……。少しですよ。そんなに沢山は、何ですからね……。

女― (男―に) 何ですか……？

男― ですから、私、今、持合せもあまりありませんから、少しですよ、その……カンパ出来るのは……。

女― わかっています。(電話に) そうなのよ。それでね……。ええ、だからそれはそっちで決めてちょうだ

い。そう……。出来るだけのことはしたいっておっしゃっているから……。

男― あなた、ねえ……、そうじゃないでしょ……。

女― (電話に) あら、まだよ。こちらでこれから相談をすませて、それからですから……。そう……。

男― 少ししか出来ないってことを言っといてくれなくちゃ駄目ですよ。

女― ええ、こっちが終わったら連絡するわ……。ええ、じゃあね、さよなら……。

男― 本当に、少ししか出来ないんですよ、私は……。そんなつもりじゃなく出てきたんですから……。

女― 大丈夫ですよ、タカコさんで、とてもいい人なんですから……。 (写真などしまいながら) そのの、

受付やってる人です。一度結婚に失敗しましてね、三十二歳で独身なんです。私も独身ですけど……。

誰かいい人があったら紹介してくれて、いつも言われてるんです、そのタカコさんにですよ。あなた、

独身ですか……？

男― いえ、だって、さっきそう言ったじゃありませんか、私には家内と子供と……。

女― そうでしたわね。とてもいい人ですよ。そのタカコさんのことですけどね、大柄で、よく気がついて

……、顔だって、そんなに悪くないんです……。

男― その……こういう場合ですね、一体いくらぐらい出すものなんですか……

女― 何でしょう……？

男― いえ、そのパレスチナのカンパのことなんですけどね。なにしろ私は、今そんなに持合せがないもんですから……。

女― いいんですよ、そんなことは……。カンパなんですから、いくらでもいいんです。気持だけで。

男― でも、事務所へわざわざ届けるとなると……ねえ……。

女― そんなこと関係ありませんよ。

男― どうでしょう、お手数ですがもう一度電話していただいて……いやいや、だから後日改めて必ずうかがいますって……。

女― 駄目ですよ。

男― 必ずうかがいますよ。私はそういうことで逃げたりなんか絶対にしませんから。

女― 駄目です。とにかく、タカコさんだって、あなたにお会いするのを楽しみにしているんですから

……。

男― だって、持ってないんですよ、私は……。 (サイフを調べて) 本当に、いくらもないんですよ。

女― 大丈夫。いい人ですよ。あなたもお会いになれば、きっとそう思います……。

男― そりゃあ、わかりますけどね……。

女― 問題は、目だけなんです……。

男― 目……？

女― もちろん、ちょっと見ただけでは、誰にもわかりませんよ。わかりませんが、片一方の目は……私、どっちかっことは敢て言いませんけども、全然見えないんです……。

男― 誰の目ですか……？

女― そのタカコさんの目ですよ。

男― ああ……。

女― でも、それが結婚の障害になるかって言うと、そんなことはありませんよ。だって、ちょっと見ただけでは誰にもわかりませんし、それに、遺伝でそうなったわけじゃないんですから。生れてくる子供に影

響があるなんてことはないんです。もし、あなたがタカコさんと結婚するとしてもですよ……。

男― 何ですって……？

女― いえいえ、ですからね、たとえばもしあなたがタカコさんと結婚するのだとしても……。

男― 何を言ってるんですか、あなたは。もう何度も言いましたでしょう、私には家内と子供が居るんですよ。

女― 奥さんとはうまくいつてらっしゃるんですか、失礼ですけど……。

男― (いきり立って) うまくいつてようといまいと、関係ないじゃないですか。ともかく私は今、結婚しようとは思っていません。その、タカコさんとも、誰ともです。

女― 何故……？

男― 何故……？ (あきらめて) 何を言ってるんです……。

女― 目のことを別にすれば、何の欠点もないんですよ。少し大きいということと、顔のことは……ほとんど悪くないんですからね……。

男― もうよしましょう、そのことは……。受付やって下さい。ヨシダ先生は、まだなんですか……？

女― 順序があるんですから、待って下さい。今、名簿の整理をしているんじゃないやありませんか……。私、筆立てここに置くことに決めただったかしら……？

男― 勤務中に抜け出しているんです。だから、急いでいるんですよ。あんまり長くなると変に思われますからね。

女― 神経ですか……？

男― 神経ですよ。特におかしいということはないんですが、最近何となく気力がなくなりましてね……。それに、夜眠れないんです。家内が心配しますから眠ったふりをしてはいるんですが、実際はほとんど一晩中、起きていますよ……。

女― このカードに名前と住所を書きこんで下さい……。 (筆立てを気にしながら) どうでしたっけ、私、これ、ここに置かって決めました？

男― さあ、どうですか……。 (カードを見ながら) この、紹介者ってところには何て書けばいいでしょう……？

女― 紹介者、ないんですか？

男― ええ、チラシを見て来たんですよ、新聞折込みの……。

女― じゃ、いいです。きれいに書いて下さいね、名前にはふりがなをふって……。

男― はい……。

女― あなた、眼鏡かけないんですか？

男― 眼鏡？ ええ……。

女― 目がいいんですね？

男― いいってことはありませんが、まあ、普通ですよ……。

女― でも……失礼ですけどあなたおいくつです……？

男― 四十五ですが……。

女― 四十五で眼鏡かけないなんて、普通じゃありませんわ。よっぽどいいんですよ、その目は……。ま

あ、大変……私、電話しとかなくちゃ…… (受話器をとろうとする)。

男― (慌ててその手を押えて) ちょっと待って下さい。何ですか、その電話って言うのは……？

女― (手を放して) 何でもありませんよ。アイバンクのことですから……。

男― アイバンク……？

女― この中二階に、私設のアイバンクの事務所があるんです。小さな所ですが、いかがわしいものじゃありませんよ。ちゃんとしたルートがあって、手術をするのは大病院の一流のお医者さんたちなんですから

ね……。

男― 何ですか、それは……？

女― ですから……あなた角膜移植のこと知らないんですか？

男― 角膜移植？知りません。

女― 簡単に言いますとね、この……、目の中に角膜ってものがあるんです。それを移植するんです。

男― 何故……？

女― 何故って……ですからね、最後まで聞いて下さいよ。今、世界では角膜がひどく不足しているんで

す。困ったことですよ。だって、角膜さえあれば手術して目が見えるようになる子供たちが、それこそびつくりするほど沢山いるんですからね。つまり、アイバンクというのは、そうした可哀そうな子供たちのために、みんなから角膜を寄付していただいで……。

男― お断りします。私は駄目ですよ……。

女― 駄目って……最後まで聞いて下さいって言うじゃありませんか。その可哀そうな子供たちは、いいですか、生まれてこのかた、一度も青空というものを見たことがないんですよ。

男― ともかく、その話は駄目です。私はいやですよ。

女― だって、片目だけでもいいんですよ。片目だけでも寄付して下さいれば、その子はその片目で青空を見ることが出来るんです。野原も、タンポポも……。

男― よして下さい。もうその話はやめましょう。私はいやだって言うじゃありませんか……。

女― あなたは、この子供たちが可哀そうじゃないんですか。（何かを抽出しの中に探しはじめる） 角膜
さえあれば、目が見えるようになるんですよ。

男― 可哀そうですけども駄目です。まさか強制するわけじゃないんでしょう？

女― もちろん、私、強制なんかしてやしませんよ。じゃ、いいです、それじゃこの本を読んでみて下さい。そうした可哀そうな子供たちが書いたものなんですよ……。（本を出して、頁を開き）そうすれば
あなただって……（読もうとする）。

男― やめなさい、あなた。よして下さい。いいですか、私は、申しあげてなかったかもしれませんが、会計事務所に勤めているんですよ。毎日、細かい数字のぎっしり詰った書類を見て暮しているんですよ。それが目を失くしてしまったら、どうなると思います。一家六人、明日から早速路頭に迷いますよ。

女― まあ（けたたましく笑って）何を言っているんです……。あなた、何か誤解してますよ……。

男― 誤解……？

女― だから最後まで話を聞いてくれて、さっきから何度も言ってるじゃありませんか。あなたが、アイバンクに角膜を寄付するのは、あなたが死んでからです。

男― 死んでから……。

女― 生きているうちは、あなた自由にお使いになっていいですよ、だってそれ、あなたの目なんですからね。

男― そうですか……。

女― そうですね。ですからあなたはただ、死んだらこの目を寄付いたしますって書類にサインをしてハンを押すだけなんです、今は……。

男― ああ、今はね……。

女― それなら、構いませんでしょう。

男― ええ、まあ、それなら構いませんけれども……。

女― 電話しますよ。

男― いやいや、ちょっと待って下さいよ。

女― 何故です？

男― いえ、ですからね、ちょっと考えさせてみて下さいませんか……。

女― 何も考えることなんかありやしないじゃないですか。ともかく、その時あなたはもう死んじやって
いるんですよ。死体なんです、あなたは。アイバンクは、その死体から目をえぐるんですから……。

男― えぐるんですか……？

女― いえ、ですから、大病院の一流のお医者さんたちがやるんですからね、そんな乱暴なことなんてする
わけじゃないじゃないですか。

男― わかりました。ですからこういうことにしましょう。とにかく私、今夜一晩考えてみますから、そ
の上で明日……。

女― 何を考えるんです、一体……？

男― だって、私の目ですよ、これは、少くとも……。

女― だから、自由にお使い下さいって言うてるじゃありませんか、私は……。使っちゃいけないなんて一
言も言っちゃいないんです。ただ、死んだらもう使い道はないんですからね、それをちょっと利用させて
もらったって構わないじゃありませんか。そうでしょ？ 死体に目なんかついてたってしょうがないじゃ
ないですか。

男― そりゃあ、まあ、そうですね……。

女― 決心なさい。こんなこと、くよくよ考えるべきことじゃありませんよ。悪いことじゃありません。それで可哀そうな子供たちが救われるんですから……。電話しますよ……。(ダイヤルをまわす)。
男― かしなあ……。

女― それに、書類にサインをしますと、アイバンクから目薬を一本もらえるんですよ。もちろん、ただでね。目を大切にしてください……。 (電話に) 第五アイバンクの城北支部……。え？ そうよ……。

男― ともかく、死んでからなんです、その……角膜をとるのは……？

女― そうです。もちろん、死んですぐなんですけどね……。

男― 死んですぐ……？

女― (電話に) もしもし……。え？ あ、そう……。 (男―に) すぐでなくちゃいけないんです。角膜と

いうのは、新鮮なら新鮮なほどいいんですよ。ですから、死にそうになりますと連絡が来ましてね、待っていて、死んだとわかるとすぐぱっと……。 (電話に) もしもし、ハナエさん……？ 私よ。え？ あら

そうお……？ いやあね……。え、そうじゃなくて、早速ですけどね、今こちらにお客様がいらして、ほんの話のついでに角膜移植のことが出たら……。え？ まさか……。そうしたら大変感動なさってね……

……。そうなの、それで是非角膜を……。ええ……。いえ、今はね、御自分の方でお使いになるんですって……。とても細かい数字を読まなければいけないんですって、毎日……。そうよ……。だから、死んでから……。え？ 四十五歳……。ええ、でもね……。そう、何があるかわからないんですから……。サインすればいいんですよ……。ハンコ……。ええ……。

男― あ、ハンコ持ってないんですが……。ハンコ、持ってきてないんですよ、今日は……。

女― 拇印……。？ 拇印でもいいのね、わかったわ……。いえ、まだ駄目よ。こちらで相談がすんで……。え

え、私が案内しますから……。そう……。じゃあね（受話器を置く）。

男ー あの……。家族の承諾っていうのは必要ないんですか、家内のとか……？

女ー 要りません。ハナエさん喜んでましたわ……。今の、受付の人です、城北支部の……。四十二歳で、まだ独身なんです。とても苦勞をした人なんですよ。私も独身ですけど、その話はもうしたわね？

男ー え？ ええ、うかがいましたけど……。

女ー 出来れば生きていうちに欲しいって言うんです、あなたの角膜を……。いえ、ハナエさんがですよ、ですから私、キツパリ断りました。そういう約束ですものね。そうでしょう？生きてるうちっていうのは駄目ですわね……？

男ー 駄目ですよ……。

女ー たとえ片目でも……？

男ー だってあなた、そういう約束じゃありませんか……。

女ー そうです。そういう約束なんです。だから今、言いましたよ私も……。それは駄目ですって……。聞いてらしたじゃありませんか、あなたも……。ただ、これから城北支部へサインをしに行くと、必ずもう一度ハナエさん言うと思うんです、生きていうちに欲しいって……。

男ー しかし、あなた……。

女ー いえいえ、ですからね、その時私も言いますからあなたからも言えればいいんです。それは駄目だって……。それは、ケチとかそういうことではなくて、当然の権利なんですから……。

男ー ええ……。

女ー でも、ハナエさんだって、悪気でそう言ってるんじゃないですよ。可哀そうな子供たちに、なる

べく早く角膜を届けてやりたいと思ってそう言うんですからね……。

男― わかってますよ。

女― いい人なんです。鼻の整形手術に失敗しましてね、そこだけが問題なんです。それだって再手術をすればね……、これはもう……、普通の顔になりますよ。

男― ヨシダ先生、まだなんですか……。

女― 素晴らしいのは、肌なんです。ハナエさんですよ。私、一度一緒にお風呂に入ったことがあるんですが、白くてポチャポチャとしていましたね、女の私でさえ変な気になるほどなんです。こう触ると吸いくようになって言いますでしよう……。

男― もうよしましょう、その話は……。

女― あなたは、タカコさんとは結婚する気になれないっておっしゃいましたが、ハナエさんとは違いますよ。会えばわかります。そりゃあ、鼻のことはありますが、再手術すれば直るんですし、お金だってそんなにからないんです。ハナエさん自分でいくら貯金持ってますからね、それにあなたがほんのちよつと足してやれば……。

男― やめて下さいって言うてるでしょう、それは……。

女― 年だって三つ違いじゃありませんか。ちょうどいいんですよ、三つ違いぐらいのが……。

男― 本当に、いいかげんにして下さいよ。どうしたんですか、ヨシダ先生は？

女― すぐ来ますよ。来たら合図があるんですから……。何をそんなに苛々なさっているんです？あなた少し欲求不満なんじゃありません？

男― あれからどのくらいいたっていると思います？ さっきも言いましたように、私は勤務中なんですよ。

女― わかってます。すぐですよ。カードは書いて頂けたんですか……？
男― 書きましたよ……職場の連中に変に思われるじゃありませんか……。わかりますでしょう？こういう所へ相談に来てるなんてことは、あまり人に知られたくないんですよ。

電話が鳴り、女―が受話器をとる……。

男― 勤務が終わってから来れば、家内が心配しますしね……。

女― (電話に) はい、ヨシダ神経クリニック……。え？ ああ……。そうですか……。

男― ヨシダ先生ですね……？

女― (電話に) ああ、そう……。

男― 遅れるんですか……？

女― (電話に) まあ、いやねえ……。ハナエさんに聞いたんでしょ……。タカコさん？ そうなのよ……

…。え？ ええ、わかってますけど……。ええ、だから、ちよつと待ってちようだい……。大丈夫よ、大丈夫ですから……。ええ、じゃあね……。

男― ヨシダ先生じゃないんですか？

女― 違います。実はその……。残った死体のことなんですけどね……。

男― 何ですか、残った死体って……？

女― ですから、あなたの……、その……、目をとっちゃったあとの死体ですよ……。

男― それが……、どうかしたんですか……？

女― いえいえ、今そのことで電話があったんですけどね……それ、どうします？

男― どうしますって……何を言ってるんですか、もうよしましよよ、そんな話は……。

女― よしましよって、何をですか？

男― いやですよ、私は。

女― だから、何がいやなんです。だって、私はまだ、なんにもお話してないんですよ。そうでしょ

う？

男― 聞いてなくなたって、いやです。ともかくその話はよしましよ。私はそういうことで来たんじゃないんですから……。

女― そういうことも何も、あなたはまだ私の話を聞いてないんですよ。聞いてなくてどうしていやだなんてことが言えるんです？

男― もう、本当にかんべんして下さい。いいじゃありませんか、私はパレスチナのことにも角膜のことも、充分協力しましたよ。

女― そりゃあわかっていきますけどね、話だけでも聞いてみたらどうなんです。そうでしょう？ 話を聞いた上でいやだっていうのなら私もわかりますけど、何も聞かない内からいやだっていうのは、変じゃありませんか。

男― そうですけれどね、聞いたらまた何か、あれじゃないんですか……。

女― 何です？

男― いやいや、私はどうもね……、駄目なんですよ、そういう話は……。

女― 言っただけですが、あなたの悪い点はそこですよ。常にひっこみ思案なんです。逃げ腰なんです。御自分でもそう思いませんか？ 私だってここに長年勤めておりましたから、初歩の心理学ぐらい聞きかじっておりますが、ヨシダ先生でしたらあなたのそうした症状を、きつと退却病だって言いますわ。

男― 退却病……？

女― 逃げるんです。現実のそうした厳しい側面から、常に目をそらそうとしているんです。それがもう癖になってしまっているんですよ、あなたの場合は……。

男― そりゃあ、まあ、そうかもしれませんけど……。

女― かもしれないじゃありません。それが全ての原因ですよ。あなたが夜眠れないのも、何となく気力がなくなったのも、いつも苛々しているのも、全てそのせいです。典型的な退却病なんですよ、あなたは……。

男― でも、それじゃどうすればいいんですか……？

女― 馬鹿なことにクヨクヨすることをやめることです。わかりますか？ 私にはあなたが、話を聞くことに何故そんなにおびえるのか、さっぱりわからないんですよ。そうでしょう。ただ、聞くだけじゃありま

せんか……。

男― わかりましたよ……。じゃ、いいです、聞くだけ聞きますけどね……。その代り、いいですか、その上で何か頼まれても、私は絶対に断りますからね。

女― 何故です？

男― 何故って……。

女― いいですか、それが……。あなたのそういう症状が退却病なんです。だってそうでしょう、話の内容がわからないうちから何故、断るなんて言えるんです。そこでもう逃げてるんです、あなたは……。本来ならですよ……。

男― わかりました。いいですよ、話してみてください。聞きますから。

女― そんなにムキにならなくたっていいじゃありませんか……。

男― でも、いいですか、断るのは私の自由ですからね。もちろん、話の内容を聞いてからですが……。

女― もちろんです。実は、今の電話は、この地下二階のミチヨさんからかかってきたものなんですけどもね……。聞いてらっしゃるんですか？

男― 聞いてますよ。

女― ミチヨさんというのは五十二歳で、婚約者がいたんですが戦争で亡くなりましたね、それ以来ずっとその人の思い出だけを大切に生きてきたんです。でも、もう年ですからね、そろそろお茶飲み友達と

どうか……。

男― 待って下さい、あなた……。さっきも言いましたように、結婚とかそういう話でしたら、私……。

女― いえ、結婚なんて、あなた……。だってミチヨさん、五十二歳ですからね……。ただ、お茶飲み友達のような……。

男― お茶飲み友達だっていやですよ。そういう話なんですか？ 違いますよ。あなたになってくれなんて言ってやしないじゃないですか。最後まで聞いて下さい。そうじゃなくて、そのミチヨさんがですね、白菊会というのをやっているんです。いえ、正確に言うと本人がやっているのではなくて、ミチヨさんは白菊会の地方支部の受付をしているんです。白菊会というのは御存知ですわね？

男― いいえ、知りません。

女― 御存知ないんですか？

男― ええ……。

女― まあ。やっぱり話してよかったわ。その白菊会というのはですね、死んだらその死体を大学病院に寄付して、解剖を……。

男― いやです。

女― 待って下さい。まだ最後まで話をしてないんですから……。

男― いいえ、いやですよ。私は、そういうことは駄目なんですから……。

女― とにかく、聞いて下さい。いいですか、今、大学病院では、解剖用の死体が、もの凄く不足しているんです。

男― 不足していようといまいと、とにかく私はお断りしますよ。

女― 聞きなさいって言うてるでしょう。最後まで。インターンのためなんです、それは……。インターンというのはお医者さんの卵ですよ。明日の医学界を背負う人たちです。ですから、あなたがその死体を寄付することによって、日本の医学に貢献することになるんです。

男― いやです。お断りします。だってあなた、先程強制はしないって言ってたじゃないですか。

女― 強制はしませんよ。でも、何故そんなに意固地になるんです。おかしいですよ、あなたの態度は……。そうでしょう、もっと冷静になって考えてみたらどうなんですか……。私たちはただ、あなたが死んだら、その死体を利用させてくれって言ってるだけなんですよ……。

男― しかしねえ……死体がなくなったらお葬式はどうなります……？

女― だって……（けたたましく笑って）あなた、そんなことを心配していらしたんですか？ 冗談じゃありませんよ。死体は解剖がすんだらお返しするんですから、遺族に……。

男― ああ、返してくれるんですか……。

女― 当然ですよ。そりゃあ、解剖するんですから、色んなところを切ったり、穴あけたり、ちぎったりするでしょうけど……。まあまあ……、そういうところはちゃんと元通りにつなぎあわせて返すんです。本当ですよ。それなら構いませんでしょう、ちゃんと元通りになってるんですから……。

男― いや、まあ、それはそうですけど……。

女― それに……、あなたにはまだ白菊会に入った場合の恩典のことをお話ししてませんけどね……。実はこれに入ると……、いいですか、たいていみなさんびっくりなさるんですけどね、まあ、そんなことか……、一年に一回、一流の大学病院で検診が受けられるんです。ただですよ。聞いたらあなただっ

て名前を知っているようなお医者さんやインターンがみんな集ってきて、あなたの身体をすみからすみまで調べてくれるんです。アラビアの石油成金だってこんなことしてもらえないんですよ、今時……。びっくりしましたでしょう？

男ー ええ、まあ……。

女ー もちろん疑い深い人は、そうやって解剖する時の下見をするんだろうとか、いつ死ぬか調べてるんだろうとか言いますが、そんなことありませんよ。日本のお医者さんたちというのは、みんな良心的ですからね……。いえ、中には悪いのもいますけど、そういう所には白菊会が死体をまわさないことにしているんです。そうですね。ですからあなたも、定期検診を受けていてちよつと怪しいなという病院があったら、必ず白菊会に連絡して欲しいんです。そうすればそこには死体はあげないことにしますから……。いいですね？

男ー ええ、いいですけど、まだ私は、だって……入ったわけじゃないんですから……。

女ー 入りますよ、大丈夫です。と言うのはですね、もうひとつ恩典があるからなんです。これは感動的ですよ。つまりですね、解剖して、お葬式をして、お墓に入りますと、そのお墓に毎年一回、白菊会の人がお参りしてお花をあげてくれるんです。ね、感動的じゃありません。死体を解剖させてもらったというただそれだけのことのために、見ず知らずの人があなたのお墓に毎年、お花をあげてくれるんですから……。

男ー はあ……。

女ー いいですか……？

男― 何です……………？

女― 入っても……………？

男― いやいや、ですから、お話しはよくわかりました……………。

女― じゃ、お入りになるんですね（電話に手を伸ばす）。

男― （とめて）だって、ちよっと待って下さいよ。まだ入るなんて決めてやしないんですから。

女― 何故決めないんです？

男― 少し考えさせてくれたっていいじゃないですか。

女― 何を考えるんです？

男― ですから、その……………、入った場合の色々なことですよ。

女― そういう風に色々なことなんてあいまいな言い方をしないで、いやならいやだっていう理由をはっきり

り言っして下さい。それが納得出来るものであれば、私もあきらめます。そうでしょう？ 今まで聞いたと

ころでは、あなたにやめる理由なんて、何ひとつないんですよ。

男― しかし、いいですか、これは私の身体ですよ。私の身体のことを私が決めて何が悪いんです？

女― 悪くはありません。だからあなたが決めて下さいって言うてるじゃありませんか。ただ、いいです

か、勘違いしないで下さいよ。その時あなたはもう死んじやっているんですからね。私たちが話してい

るのは死体のことなんです。生きている間は、確かにその体はあなたのもものかもしれませんけど、死ん

だらそうじゃありません。それは人類の死体です。人類全てのものですよ。わかりますか。白菊会があな

たからその承諾書をとるのは、生前それがたまたまあなたのもものだったからということ、便宜上そうし

ているだけなんです。そうした謙虚さにつけこんで、いたずらに所有権を主張するなんて、みっともない

ことだと思いませんか？

男ー いえ、私は別に所有権を主張しているわけではないんですから……。

女ー それじゃ何なんです。第一、そんなもの後生大事に抱えこんでいて何になるんです。あと、焼いて埋めちゃうだけなんですから……。それをちよつと人類のために役立てて、何が悪いんです。

男ー わかりました。ですからね、今夜一晩だけ、考えさせて下さい。一晩だけでいいですから……。

女ー 何を考えるんです？ もう考えることなんて何もありませんか。

男ー だって、家内と相談する必要がありますでしょう。そうですね、あなた。こういうことを、家内と相談しないで決めていいはずがないんです。これは家内の問題ですからね、むしろ。家内が私の葬式を出すんですから……。

女ー お葬式までには死体は返ってくるって言いましたでしょう、ちゃんとなぎあわせて……。

男ー しかし、その他のことだってありますよ、色々と、相談しなければならぬことが……。女ー い

いですか、あなた。さっきも言いましたように、あなたがこれこれの問題があつて、これについては家内と相談しなければいけないからって、はっきりと説明出来るんです。それからかまいませんよ。奥さんと相談なさってきていいです。でも、あなたそうじゃないんですよ。あなたにはそんなものは何もありません。

す。ただ、ここから逃げようとしてそうしてるだけじゃありませんか……？

男ー だったらどうだって言うんです……。

女ー 何ですか……？

男― だったらどうだって言うんですか。逃げたらどうだって言うんです。いいじゃないですか。自由なんですよ。あなたさっきそう言いましたよ。強制はしないって。断るのも断らないのも私の自由だって。そうですよ。違うんですか……？

女― 落着いて下さい……。もっと冷静になったらどうなんです……。そんなに大げさに考えるべきことじゃないんですから……。そうでしょう。あなたは何か、白菊会に対して、偏見を持っていますよ。そんなことはありません、入ってみればわかりますが、とても気持のいい会ですよ……。

男― いや、それはもう、わかっていますから……。

女― 時々茶話会を開くんですけどね、とても感じのいいお爺ちゃんや、お婆ちゃんが集ってきて……。

男― お爺ちゃんや、お婆ちゃんなんですか……？

女― いえ、若い人もいますよ。この前二十歳の青年が入ったって話を聞きました。すぐ次の年に死にましたけど……。

男― だって、それじゃあ……。

女― いいえ、死んでない人もいますよ。茶話会の度に、まだ死なないのかしらって、みんな疑問に思っている人もいますから……。いえ、それほど丈夫な人って意味ですよ……。その点については、私からよく言うておきます。あなたのことを仲間はずれにしないように……。

男― いや、別にそういうことじゃありませんよ……。

女― だってまさかお金のことじゃありませんでしょう？

男― 何ですか、お金のことって……？

女― よくそういう人がいるんです。解剖させてやるから、そのかわりいくらか払えって言うんですよ。

男― そんなこと言ってやしませんよ……。

女― 言ってやしませんけど、もしそういうことでこれを断るんでしたら、それは間違いですよ。これは無償の行為であるべきなんです。白菊会は営利団体じゃないんですからね。

男― わかっていますよ、そんなことは……。

女― どうせ焼いて埋めるだけの死体じゃありませんか。それでいくらかもうけようなんて、浅間しいとは思いませんか？

男― だって……、何を言ってるんです。私はひとことだって言ってやしませんよ、お金をよこせだなんて……。変ないいかりをつけるのはよして下さい。

女― だったら、何故断るんです？

男― 何故って……、だからそれはお金のことじゃありませんよ。それをお金にしようなんて、私は考えもしなかったんですから……。本当ですよ。誤解しないで下さい。そうじゃなくてですねえ……。私は、ただ……。

電話が鳴る……………。

女― きっとミチヨさんですよ。催促の電話なんです。(受話器をとる) せっかちなんですよ。これだからいつまでたっても結婚相手が見つからないんだわ……。(電話に) はい、もしもし……。

男― 私、まだ決めてませんよ。いいですか。入るとは言ってますからね……。

女― (電話に) え? ああ、マサコさんの……? いえ、だから……そうじゃないわよ。ええ、わかってますけど……。ちょっと待ってちょうだい。今、ミチヨさんとこのことでもめてるんですから……。ええ、大丈夫。大丈夫よ……。ええ、そうね……。わかってます……。わかってますよ……。はい、じゃあね……。 (受話器を置く)。

男― 何ですか?

女― 何でもありません。ミチヨさんとかと思ったんですけど、そうじゃなかったんですよ。でも、急いで下さい。もう次が来てるんですから……。白菊会のことはいいですね……? ?

男― 良くはありませんよ。しかし、何ですか、次って……。

女― 先に白菊会のことを決めて下さい。ともかく、ミチヨさんこの電話の向うで待ってるんですから……。

男― 待ってるったって、あなた……。一体これはどういうことになってるんです……? ?

女― だから、あなたが白菊会にお入りになるって言えば、今の電話のこともお話しますよ。

男― 何ですか、この事務所は……。

女― いいです。そんなに気にするんでしたら、今の電話のことを先にお話ししときますけどね……。それ

じゃ、白菊会のことは入ったことにしときますよ。

男― 待って下さい、そんな、あなた……。

女― よしなさい。そんな下らないことでいつまでもガタガタするのは……。いいですか、今の電話は、マサコさんからなんです。この四階に、安楽死協会の事務所がありましたね……。

男― 冗談じゃありませんよ。

女― マサコさんのことは、そんなに気にすることは無いんですよ。この人はもう、とっくに結婚のことはあきらめていますからね。とてもいい人なんです。ほんの少し太りすぎなんです……。

男― ふぎけるのはいいかげんによして下さい。

女― ですから、そのことはいいって言うてるじゃありませんか。

男― 何ですか一体、安楽死協会だなんて……。

女― あら、安楽死協会のこと、御存知ないんですか……？

男― どうせその会員になれとか何とか言うんでしょう？

女― そうですよ。悪いことじゃないと思いますけど……。

男― 何故私が安楽死しなくちゃいけないんです？

女ー 今は必要ありません。でも、あなたが不治の病いにかかって、七転八倒の苦しみを味わうことになれば……。

男ー よして下さい、そんな話は……。

女ー あなたがしろって言ったんですよ。

男ー いいですか、私が今、ここに何をしに来ているか知っていますか？ そうでしょう？ ここはヨシダ神経クリニックじゃないんですか？ ヨシダ先生の、神経科の相談室なんでしょう？

女ー そうですよ。

男ー 私は、私の神経が参っているから、そのことでヨシダ先生に相談に来ているんです。どうしたんですか、そのことは？

女ー ですから、そのことは暫くお待ち下さいって言ってるじゃありませんか……。

男ー 待てませんよ。一体あれからどのくらいたったと思います。私は事務所には、ちょっと歯痛の薬を買って帰って出てきていますからね。どんなに薬屋が混んでたって、こんなに時間がかかるはずありません。もうみんな変に思ってますよ。もちろん私は、薬屋の親父に言われて帰りに歯医者へまわったって言おうと思ってますけど、それにしたってもうギリギリなんですよ。

女ー 歯のことでしたら、三階のフミコさんが詳しいですよ、電話してみましようか？ (受話器に手がかかる)

男ー よして下さい。そういうことじゃないんですから。

女ー でも、歯でしたら放つとかない方がいいんじゃないありませんか？

男― 私は、歯なんか悪くないんです、悪いのは神経ですよ。だからここへ来てるんじゃないやありませんか。
ヨシダ先生はどうしたんです？ まだ来てないんですか？ 来てないでしたら、自宅へでも何でも電話
してみたらどうです。そのために電話があるんでしょう……？

女― ……。

男― あなた……。

女― (ぼんやり) やっぱ私、どうしてもこの、筆立ての位置が気になるわ……。

男― どうしたんです、あなた……？

女― (ぼんやり) どこか、違うんです……。どこか、ほんのちよつとですけどね……。

男― 相談室っていうのは、そこですか……？ (言いながら出てゆく)

女― (キツとして) 待って。駄目ですよ、受付もしないうちに。あなた……。 (あきらめて、ゆっくり女
― 坐る)

男、ぼんやり、現れる……。

男― あれが、相談室ですか……？

女― そうです……。

男― 誰もいませんでしたよ……。

女― ええ……。

男― 家具も、何もありませんよ……。

女― そうです……。

男― ねえ、ヨシダ先生なんて、いないんじゃないんですか？ そうでしょ？ ヨシダ先生なんてはじめからいなくて、ここにこうして受付だけがあるんじゃないんですか？ そうですね？ ただあなただけが、こうして毎日ここに坐っていて、来る客来る客をみんな、ああだこうだ言っただましているんです……。

女― そうですよ、でも、それがどうだって言うんです……？ 大発見をしたとでも言うんですか……？

男― しかし、何故なんです？ 何故そんなことをしているんです……？ 一体あなたは、何をしようとしているんです……？

女― 私たちは、待っているんです。ずっと長いこと、私たちは待っていたんです。あなたなんかの想像も及ばないほど長いこと……。そうですよ。このビルには、このほかに三十七の受付があつて、それぞれに一人ずつ女の子が坐つて、みんなじつと息を殺して待っていたんです。あなたをですよ。私たちは、あなたを待っていたんです……。

ガーンと、ビル全体をゆるがすような音がして、男―は、打ちのめされたように、頭をかかえてうずくまる……。

男― (うめくように) でも、何故私を……？

女― それほど思いがけないことはありません。あなたが、会計事務所に勤める四十五歳の男性で、奥さんと四人の子供がいて、生きて、動いて、しゃべるといふ意味において選ばれたのです。そのほかにはあなたには、何の意味もありません……。

男― ……。

女― でもね、あなた。そんなに落胆することはありませんよ。あなたは受付けられたんです。私たちはあなたを、その意味に従って受け付けました。そのことをむしろ喜ぶべきですよ。そうでしょう。さあ、もういいかげんに立上ったらどうなんです。元気を出すべきですよ。そして、勇ましく三階へ上っていつて、ベトナムの難民のために財布をはたきなさい。次に中二階へ行って、角膜移植の契約書にサインをするんです。それから地下二階へ入って白菊会に入り、最後に、安楽死協会の会員になるんです。いいですか、あなたはもうそこからは逃れられないんですよ。それを断る理由なんて、あなたにはもう何んにもないんですからね。いえ、むしろ、そこにしかあなたの希望はないんです……。

声に送られて、男―、ぼんやりと出てゆく……。

女―、見送って受話器をとり、ダイヤルをまわす……。

女― (電話に) ベトナム難民援助協会……、三階のよ……。 (筆立てを動かす) あ、タカコさん……。
今、そっちへ行ったわ……。 ええ、そうなの……。 私、私が独身だってことを、二回も言っちゃったの
に、その人ったら、何故そうなのかってことをすら聞かなかったのよ。 ええ、そう……。 いえ、大丈夫
よ……。 そのことは私、よく言っていたから……。 ええ、よろしくね……。 じゃ、さよなら、またね……。
……。

白衣を着た《ヨシダ先生》が、背後からあたふたと駆け込んでくる。

どうやらこれは、先ほど出て行った男に似ている。

男― 今、声が出たようだが、お客じゃなかったのかね？

女― いえ。部屋を間違えたらしいんです。安楽死協会へはどう行くんですかって……。

男― 安楽死協会……？ 馬鹿じゃないのかね、あんなところへ行くなんて……。

女― ですから私もそう言いましたの。病気でもないのに、あんな所にお入りになることはありませんって……。
でも、どうしてもお入りになるってことでしたから……。

男― どういうわけなんだろうね、客がさっぱり来ないというのは……。

女― どうしてなんですかねえ……。

男― 気がついてないんだよ。本当はみんなかなりノイローゼになっているんだが、自分じゃそう思ってたなんて奴が多いんだ。そのせいだよ。そいつらに、お前さんはノイローゼなんだよって、何とか気付かせてやる方法はないものかなあ……。

女― そうですわね……。

男― 宣伝が行き届いてないとは思わなにかね……？

女― そんなことはありません。私、知りあいにはずいぶん電話もしましたし、新聞折込みのチラシだって、あんなに沢山出したんですもの……。

男― そうだね……。

女― 大丈夫ですよ。いまにきつとやってきます。

男― いまにね……。

女― ですから先生、もう暫くそちらの部屋でお休みになって下さい。お客様がおいでになったら、合図をしますから……。

男― そうかね……（出てゆく）。

女― 悲観なざることはありません。神経の参ってる方は、びっくりするほど沢山いるんですから……。
（インターホンを開けて、極めて明るく）はい、次の方どうぞ……。

底本：『マザー・マザー・マザー（別役実戯曲集）』三一書房

1980（昭和55）年5月31日第一版第一刷発行

1991（平成3）年2月28日第一版第四刷発行